

# モレルの家系<sup>1</sup>

林 田 治 男

## On the Family Biography of Edmund Morel

HAYASHIDA Haruo

### Abstract

Generally speaking, the family environment is an important factor in explaining the development of an engineer's ability.

In this article I attempt to formulate the family tree of Mr. Edmund Morel, who was the first Engineer-in-Chief of the Imperial Railways of Japan. His paternal grandfather was a wine merchant at Piccadilly, London, and his father and two of his paternal uncles succeeded the business. On the other hand, his maternal grandfather was a well-known solicitor at Golden Square, London. Two of his maternal uncles were brilliant lawyers, especially the eldest one was the first Chief Justice of the Supreme Court of Victoria and conferred a knighthood. One was a publisher of popular magazines and kept company with Charles Dickens. And one was a respectable surgeon. All the uncles except publisher moved to Australia and gained the social eminences there.

Morel was able to study at King's College, London. I contend that he was stimulated and assisted intellectually by his relatives, and it played critical role on his career including engineering practice.

### Keywords :

- ① Family Record Centre
- ② Birth, Marriage, and Death Certificate
- ③ Census
- ④ Post Office Directory
- ⑤ Law List

---

1) 本稿の最終段階で査読者から適切なコメントを戴き、またケアレスミス指摘も受けた。その貴重なアドバイスを、記して感謝の意を表したい。なお残存するであろう誤りは、偏に筆者の責任であることは勿論である。

鉄道の初代技師長エドモンド・モレルは任務を誠実に遂行していただけでなく、着任直後に政府主導による公共事業の推進や高等教育の必要性などを建議した。それによりいち早く工部省や工部大学校が設置され、日本の近代化の扉が開かれた。また彼は鉄道開業の榮譽に浴することなく志半ばに夭折したことも加わって、日本では高く評価されている。このような彼の能力や動機を明らかにするため、その経歴を調査することにより優れた功績の背景を探っていくことは意義深いと考えられる。

エンジニアの技能形成過程を辿る上で、家庭環境は重要な意味を有する。本稿では、モレルの父母と姉妹、および祖父の家族を取上げて彼の境遇をやや詳細に紹介していく。別稿で論じる予定だが、彼の学業はあまり芳しくない。しかし母方の祖父や伯父達の経歴を調べると、彼らから大きな影響や恩恵を受けたことが類推される。彼の家庭環境や実務経験に及ぼした役割は重要だと思われる。これは本稿の重要な含意と言えよう。

なお本稿で提示した表はすべて、Family Record Centreで入手した各証明書をもとに、必要箇所のみを取上げて筆者が作成したものである。

#### キー・ワード

- ①戸籍登記所 ②出生・結婚・死亡証明書 ③国勢調査
- ④郵便住所録 ⑤法律家名簿

## 1. 父母

父母の経歴を各証明書、Census, Post Office Directory などを使って探っていこう。

### 1-1. ピカデリー

モレルの父 Thomas Annet Lewis Morel と母 Emily Elizabeth A'Beckett の「結婚証明書」によれば<sup>2</sup>、1838年9月22日、新婦の住所に近い Hampstead の教会で結婚した。立会人は新婦の父 William A'Beckett とトーマスの弟 Henry Morel であった。記載事項のうち、関連する重要な箇所を再現しておこう。

トーマスの父 Louis Morel は、Piccadilly, London のワイン商で既に死亡していた。父の仕事を継いだトーマスの住所は、St. James, Westminster になっているが、*Post Office London Directory* (POLD と略す) や Census (国勢調査) 個票資料などから、それは210

---

2) Family Record Centre (FRC と略す) で入手したモレルの「出生証明書」に、父親の名前と職業、母親の名前と結婚前の姓などが記されている。そこで父母の「結婚証明書」の入手が可能となる。

表1 トーマスとエミリーとの「結婚」38年9月22日

Name	Condition	Rank of Profession	Residence at the Time of Marriage	Father's Name	Rank of Profession of Father
Thomas Annet Lewis Morel	Widower	Wine Merchant	St. James, Westminster	Louis Morel (deceased)	Wine Merchant
Emily Elizabeth a' Beckett	Spinster		Hampstead	William a' Beckett	Solicitor

[出典]；FRC で入手した「結婚証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

& 211, Piccadilly を指している。エミリーの父 William A' Beckett は健在で Solicitor（事務弁護士）をしており、このとき既に Hampstead に居を構えていた。

他方トーマスが、33年9月28日に Ann Martin Lopes と結婚した旨の「結婚証明書」を、筆者は07年夏 City of Westminster Archives (CWA と略す) で入手した。立会人は L.Morel と C.B.Morel と記されているが、トーマスの父 Louis と弟 Charles Baptiste と断定してよからう。エミリーとの「結婚証明書」記載の、Widower（男やもめ）と整合的である。アンはその名前からポルトガル系であろう。当時離婚や再婚に制約が多かったので、彼女はトーマスが再婚する前に死亡していたと考えられる。さらに、41年 Census 資料に記載がないので、トーマスとアンとの間に子供はいなかったと推測される。

2番目の妻エミリーは3人の子供を残し46年に事故で死亡した。31歳の若さだった。

そしてトーマスは50年5月16日に Christiana Lodder Budd と結婚した。立会人はトーマスの弟ヘンリーと亡妻エミリーの妹 Margaret Louisa Jane Terrell だった。トーマスと義妹との良好な関係を暗示している。後述するように、51年には Ladbroke Villas に住んでいるので、結婚直後、住居を移したと考えられる。この「結婚証明書」の記載事項のうち、関連する重要な箇所を再現しておこう。

表2 トーマスとクリスティアーナとの「結婚」50年5月16日

Name	Condition	Rank of Profession	Residence at the Time of Marriage	Father's Name	Rank of Profession of Father
Christiana Lodder Budd	Spinster		Scarborough, in the county of York	Richard Budd (dead)	Gentleman

[出典]；FRC で入手した「結婚証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

しかしトーマスは長く患ったあと、60年に肝臓病で没した。52歳だった。後妻のクリスティアーナは夫の死後、後述のようにイングランド南部海岸沿いの白亜の壁で有名な Eastbourne で一人暮らしをしていたが、77年に亡夫と同じ肝臓病で死亡した。69歳だった。彼らの「死亡証明書」のうち、重要事項を再現しておこう。

表3 エミリー、トーマス、クリスティアーナの「死亡」

Name	When died Age	Where died	Occupation	Cause of death
Emily Morel	01-08-1846 31	210, Piccadilly St.James Square	Wife of Thomas Morel	Disease of the brain- caused by loss of blood, during a miscarriage
Thomas Annet Lewis Morel	24-11-1860 52	Ladbroke Villas Kensington	Italian Ware- houseman	Disease of liver A long time assisted 2 months
Christiana Lodder Morel	06-06-1877 69	South Street Eastbourne	Widow of Thomas Morel	Diagnosis of the liver 6 years Assisted 7 months

[出典]；FRC で入手した各人の「死亡証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

さらに Census 資料に当たってみよう。41年のトーマス一家はピカデリーに住んでおり、次のようになっている。

Thomas Morel, 30, Wine Merchant

Emily Morel, 25

Emily do, 1 and 1/2 [1歳半]

Edmund do, 6 months [6ヶ月]

他にトーマスの弟たちや、住み込みの男1人、女4人の計5人の使用人がいた。

## 1-2. ノッティングヒルとその後

51年度 Census では、ケンジントンの20 Ladbroke Villas, Kensington に移っている。ラドブローク・ヴィラのあった Notting Hill 地区は、当時拡張を続けるロンドンの北東部に位置し、やや小高くなった地形の新興の住宅地であった。

Thomas Morel, 43, Annuitant, St Margaret, Westminster

Christiana do, 43, , Moorfields

Emily do, 11, Scholar, St James, Westminster

Edmund do, 10, do, ditto

Agnes do, 8, do, ditto

最後の欄は、出生地である。トーマスが Annuitant（年金生活者）となっているが、50年のクリスティアーナとの「結婚証明書」や60年の「死亡証明書」の職業欄から、「ピカデリーでワイン商を営む」という51年版 POLD の説を、筆者は採用する。年齢からみても、弟のヘンリーや Edmund Stephen に商売を任せて引退していたのではなく、ノッティングヒルからピカデリーの店に通っていたと考えられる。子供たちは“Scholar”となっているが、学校の生徒を指している。

他に33歳の家政婦、30歳の子守り、27歳家庭教師の女性住込み使用人が3人、34歳の男

性住込み料理人が1人いた。当時に地図によると、「ラドブローク・ヴィラ20番地」西脇の路地には、Wilby Mews という厩舎があった。それゆえ、この厩舎に馬車と馬を保有し、この男性住込み料理人は御者も務め、主人のトーマスをピカデリーの店まで送迎していたと考えられる。モレルは57年秋に King's College School (KCS と略す) で、翌年には King's College, London (KCL と略す) に学んでいるが、この馬車で通ったと思われる。

POLD によると、「ラドブローク・ヴィラ20番地」の住人は次のようになっている。51年版では、Joseph Simpson と記され、52～54年版が National Archives (国立公文書館, NA と略す) 図書室にはなく、55年版から Thomas Morel を確認できた。60年、61年版もトーマスだが、62年版では Robert Law に変わっている。トーマスの死後、一家が離れ離れになったという61年 Census とも整合的である。なお、当時の POLD には1～2年の遅れがあることも確認できる。

モレル一家が50年代に暮らしていた「ラドブローク・ヴィラ20番地」は、その後の名称・地番変更により、現在の52 Ladbroke Road に相当する。ところで、この50年代の住居の探索・特定化は困難を極めた。07年夏の調査時には、当初当該地図でも現地調査でも発見できなかった。諦めかけた頃 *General Index to the Old Ordnance Survey Maps of London* (『ロンドン旧測量図索引』) を入手し、1871年、現在のラドブローク・ロードへ改名されたことを知った<sup>3</sup>。また Old Ordnance Survey Maps (『旧測量図』) の Notting Hill の部でも確認できた。

08年夏の調査で、次のように“20 Ladbroke Villas”が1861年に“52 Ladbroke Road”に名称および地番変更があったことを確定できた。Ladbroke Villas から Ladbroke Road への名称・地番変更は、NA 図書室にある *London Streets Number Changes* (『ロンドン街路名称・地番変更』) でも確認できる。(通りに向かって)北側の1～8番地は、現在の77～91番地、(通りに向かって)南側の9～22番地は、現在の40～54番地と1861年に改称された。したがって、モレル一家が住んでいた家は、現在の“50, 51, or 52 Ladbroke Road”に相当する。次に62年版 POLD で、モレル一家の後に居住していた Robert Law esq. の住所が、71年版 POLD では“52 Ladbroke Road”となっているので、現在の「ラドブローク・ロード52番地」だと断定できる<sup>4</sup>。なお62年版 POLD で“21 Ladbroke

---

3) 同書, p.65。

4) 08年夏「ラドブローク・ヴィラ20番地」を確定でき、早速現地を訪れた。住人と会い来意を告げたが、外からの写真撮影の了解を取れた。150年も前の人とは無関係だし、観光地化されると迷惑で静かに暮らしたいのであろう。厩舎だったウィルビー・ミューズは、中の道路部分が膨らんだ住宅地となっていた。西隣は、“Ladbroke Arms”という上品なパブになっていた。

Villas”の John Campbell は、71年版 POLD では“50 Ladbroke Road”になっている。これらは、地番変更とも整合的である。

ところで61年版 POLD で、“20 Ladbroke Villas”の住人はロウに変更されている。

「ピカデリー210と211番地」の直近の地下鉄駅は Piccadilly Circus, 「ラドブローク・ロード52番地」の駅は Nottinghill Gate である。

60年にトーマスが死亡し、61年 Census では、3人が別々で次のようになっている。

Christiana L. Morel, 52, Lady, London (Eastbourne 在住)

Emily Morel, 21, Niece, St James (Kingston, Surrey 在住)

Agnes Morel, 18, Visitor, London (Kensington 在住)

しかし筆者はどうしても肝心のエドモンドを探し出せなかった。調査時点の4月7日に外国にいたのであろうか。

71年度の Census によれば、クリスティアーナは英仏海峡に面したイーストボーンで寡婦暮らしをしていた。そして当地で77年6月6日69歳で亡くなった。40歳過ぎに結婚したこと、および61年 Census でも同居・養育していないので、彼女に子供はいなかったと思われる。

## 2. 姉妹

モレルには1歳上の姉エミリーと2歳下の妹アグネスがいた。彼女らの動向を紹介しておこう。また補論としてモレルの綴りについて確認する。

表4 3人の子供の「出生」

Name	When born	Where born	Father's Name	Mother's name	Occupation of father
Emily (Girl)	05-10-1839	210, Piccadilly St. James Square, Westminster	Thomas Annet Lewis Morel	Emily Elizabeth Morel (a' Beckett)	Italian Warehouseman and Wine Merchant
Edmund (Boy)	17-11-1840	No.1, Eagle Place St. James Square, Westminster	Thomas Annet Lewis Morel	Emily Morel (a' Beckett)	Italian Warehouseman and Wine Merchant
(Girl)	11-09-1842	No.1, Eagle Place, Piccadilly	Thomas Morel	Emily Morel (a' Beckett)	Italian Warehouseman

[出典]；FRC で入手した各人の「出生証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

## 2-1. 姉エミリー

トーマスとエミリーの間には姉 Emily, Edmund, 妹 Agnes の3人の子供が生まれた。「出生証明書」の記載事項のうち関連する重要部分を再現しておこう。

姉エミリーは、39年10月5日「ピカデリー210番地」で生まれ、12月4日に届けられた。

60年11月に父トーマスが亡くなった後、家族は離れ離れになった。61年当時、エミリーはオーストラリアのヴィクトリア州の初代 Chief Justice of the Supreme Court of Victoria（最高裁長官）を退いた母方の伯父 Sir William A' Beckett と同居していた。

そして66年10月18日に、Doctor of Medicine（医学博士）の George James Stilwell と、ロンドンの Paddington で結婚した。彼は外科医の父 George Stilwell と母 Jane Catherine の子供として33年4月13日に生まれた。彼は、エディンバラ大学の医学博士で、Royal College of Physicians（王立内科医大学）フェロウ、Royal College of Science（王立科学大学）フェロウであった。残念ながら、翌67年7月22日に、Epsom, Surrey で夫ジョージが死亡した。34歳だった<sup>5</sup>。

「出生証明書」も発見できないし、71年以降の Census でも同居・養育していないので、ジョージとの間に子供はいなかったと思われる。

Census 資料に拠れば、夫と死別後71年までは、彼の生地サリー州のイプソンで亡夫の家族と同居し、91年まではイプソンに住んでいたが、1901年までには Sussex に移っている。その間利子収入で生活していた。

エミリーは、1929年6月12日、ロンドン郊外の Bromley で、義理の甥 George R. Stilwell に看取られて亡くなった。89歳と長寿だった。

表5 姉エミリーの「結婚」66年10月18日

Name	Condition Age	Rank of Profession	Residence at the Time of Marriage	Father's name	Rank of Profession of Father
George James Stilwell	Bachelor 33	Doctor of Medicine	Moorcroft House Uxbridge	George Stilwell	Medical-man
Emily Morel	Spinster 27		39 Oxford Terrace	Thomas Morel	Esquire

[出典]；FRC で入手した「結婚証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

## 2-2. 妹アグネス

妹アグネスは、生まれたときから病弱だったようである。9月11日に生まれたのに、10

5) 経歴は、1867年8月10日号 *The British Medical Journal* 「死亡記事」を参考にした。なお同誌79年3月15日号によれば、イプソンで父 George が79年1月5日74歳で亡くなった。

月15日に名前の欄は無記入で届けられている。しかし51年Censusなどで、名前が判明する。生地はモレルと同じ「イーグル・プレイス1番地」となっている。

アグネスは、父トーマスが亡くなった後の61年Censusでは、Thomas Jacomb 家に visitor として登録されている。71年調査では、ロンドンの Hayes Norwood の小病院の入院患者 (Lunatic Patient) として療養していた。81年時点では、Dorset, Charmouth 在住の Royal College of Science (王立科学大学) フェロウの Henry E. Norris 家に、年金暮らしの border として身を寄せていた。91年には、ロンドンの Marylebone 在住の開業医 Martin Brewjes 家に、自己資産で生活している下宿人として暮らしていたが lunatic の注記がある。その間、おおむね闘病生活を送っていたようである。

そして98年7月17日、ロンドン郊外の Wandsworth で、乳癌を2年間患った後、姉エミリーに看取られて亡くなった。幸薄い独身の55歳だった。

表6 姉エミリー、妹アグネスの「死亡」

Name	When died Age	Where died	Occupation	Cause of death
Emily Stilwell	12-06-1929 89	6, Brackley Road, Beckenham	Widow of George James Stilwell, Doctor of Medicine	Cardiac Failure,
Agnes Morel	17-07-1898 55	115 Upper Richmond Road	Of Independent Means	Cancer of Breast, 2 years, Heart Failure, 1 hour

[出典]；FRC で入手した各人の「死亡証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

### 2-3. Morell か Morel か？

モレル本人も含めてモレル姓の家族や親族たちの「出生証明書」「結婚証明書」「死亡証明書」はすべて“Morel”表記である。父トーマスが記したと考えられる KCS と KCL への「入学身上書」、英国土木学会への「入会申請書」およびモレル本人が署名したと考えられる「入会誓約書」なども“Morel”と記されている。したがって、“Morel”と綴るのが正しいと断定できる。

Census や POLD で“Morell”と表記されている場合があるが、これらは単なる転記ミスである。ただし資料調査を行う場合、念のため“Morell”でも検索したほうがよい。そのほうが「漏れ」を防げる。

## 3. 父方祖父ルイ

父方祖父をみていこう。CWA で、07年夏筆者が入手できた父方の祖父 Louis Morel の「結



婚証明書」に次のように記してある。

「Louis Morel が Mary Boden と1804年11月25日に結婚した。」

37年3月に公表されたルイの「遺言書」によれば<sup>6</sup>、妻は Jane となっている。

当時離婚は困難で、たとえ可能だとしても再婚するには制限があったので、メアリーとは死別し、ジェインと再婚したと考えられる<sup>7</sup>。

ルイには年齢順に次の5人の息子がいた。

Thomas Annet Lewis Morel（モレルの父親）

Louis

Henry

Charles Baptiste

Edmund Stephen

トーマスは、父親名のフランス系 Louis を英語風表記して Lewis も冠されている。先述のように彼がモレルの父親である。71年11月11日付 *The Japan Weekly Mail* (JWM と略す) のモレルの「追悼記事」にある “Born of mixed French and English parentage” という紹介は、この祖父ルイのことを指していると考えられる。「遺言書」が37年3月に公開されているので、彼は37年初めに死亡したと類推される。

ところで、16世紀以降の亡命ユグノー協会のリストにモレルという名前が頻出し、後述する POLD のルイの記事を加味すると、祖父ルイがフランス革命～ナポレオン戦争の混乱を避け英国に亡命してきた可能性も考えられる。

周知の如く、1837年6月以前の「結婚証明書」には、職業、住所、および父親の氏名、職業などが記してない。したがって通常の探し方では、これ以上の探索は困難となる。

父親と同名の息子 Louis Morel の「死亡証明書」によれば、彼は Portrait Painter で、42年5月13日29歳の時、211 Piccadilly で亡くなった。したがって彼の誕生日は、12年5月14日～13年5月13日となる。本稿では12年説を採用する。（以下「出生証明書」を得られなかった各人の生年の推定は、兄弟の生年月日や Census 記入の年齢から推定する。その場合年号のみを記すことにする。）

CWA で入手した Henry の「出生証明書」によれば、ルイとメアリーの子供として、14

---

6) Catalogue Reference: Prob 11/1875. Image Reference: 24。「遺言書」を “Will” という。

ちなみに1858年以前の「遺言書」は、FRC で容易に検索でき、閲覧・複写が可能である。ただし、「ひげ文字」で書かれており読むのが容易ではないが。

7) メアリーの「死亡証明書」、ジェインとの「結婚証明書」は FRC ではなく、彼女らの「出生証明書」「死亡証明書」を含め、今後の調査課題である。

年10月30日に生まれた。生地は Brewer Street, 父親の職業は merchant となっている。

表7 叔父 Louis Morel の「死亡」

Name	When died Age	Where died	Occupation	Cause of death
Louis Morel	13-05-1842 29	211, Piccadilly St.James Square	Artist	Nervous fever

[出典]：FRC で入手した「死亡証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

#### 4. ピカデリーの店

さらにモレル家の住所や商売の変遷を探っていこう。各証明書, POLD, および Census 資料によって調べていく。

##### 4-1. 1860年頃まで

まず POLD を中心に、辿っていこう。筆者は08年夏, NA 図書室でその作業に当たった。余談ながら, POLD の編集と発行は, 英国の19世紀初頭からの郵便業の整備を, ひいては経済インフラの充実・発展を示唆していると言えよう。NA 図書室には, 1811年, 19年, 22年, および24年以降基本的にすべての POLD があり, 閲覧できる。それらによると, まず11年版にはモレルの記載がない。しかし, 19年版に次のように記されている。

Morel & Co., oilman, 34 Brewer st., Golden sq.

14年に生まれたヘンリーの「出生証明書」にある「ブリューワー・ストリート」, 「商人」という記載事項と矛盾がない。これらから, 14年以降19年までに, 祖父ルイは「ゴールデン・スクエア」のすぐ南にある「ブリューワー・ストリート34番地」で, 油の商いを始めたと言えよう。

ところで油・ワイン商のルイが, わざわざ「遺言書」を残している。また先妻に先立たれたトーマスの再婚相手は事務弁護士の娘である。やや唐突かもしれないが, ルイおよびトーマスと, エイベケット父娘の接点は, このブリューワー・ストリート時代にあるのではないかと推測できよう。

POLD の22年版から29年版までには, 次のようになっている。

Morel L., Oilman, 210, Piccadilly.

すなわち, 19年から22年の間に, 目抜き通りの「ピカデリー210番地」に店を移した。30年版の表記は, 次のように変更されている。

Morel L, Oilman and Wine-merchant, 210 & 211 Piccadilly.

ピカデリーの210番地のみならず211番地にも店を広げ、油と同時にワインを扱い始めたことが判る。商売が軌道に乗り、順調に発展していていることを示唆している。

32年版から37年版までは、次の見出しに変っている。

Morel L & Sons.

長男のトーマス、3男のヘンリーらがルイの店を手伝い始めたことを示している。

38年版から61年版までは、基本的に次のように記されている。

Morel Thomas & Henry, Italian warehousemen and wine merchants, 210 & 211 Piccadilly

37年版まではルイの名前が記載されていたが、38年版以降それがない。したがって「遺言書」の公開年月から、ルイの死亡推定時期を37年初めとしたが、POLDの記述からもその判定がほぼ間違いないと言えよう。38年～60年には、主としてトーマスとヘンリーが店を取り仕切っていたことを示している。51年のCensusにはトーマスは「年金生活者」と記されていたが、実際には家族の住居をノッティングヒルに住所を移した50年代にも、ピカデリーで商売に勤しんでいたことを示唆している。加えて、40年に生まれた初代技師長モレルの「出生証明書」に記載されている父親の職業とも一致している。

62年版からトーマスの名前が記載されなくなる。

Morel Henry and Edmund Stephen, wine merchants & italian warehousemen, 210 & 211 Piccadilly.

63年版では、さらに表記法が変更されている。

Morel Brothers, wine merchants & italian warehousemen, 210 & 211 Piccadilly.

60年11月24日にトーマスが亡くなり、店は弟のヘンリーとエドモンドに委ねられた。

Censusの個票を用いて補強を試みよう。41年調査では次のようになっている。同居していたトーマスの家族は省いた。

Thomas Morel, 30, Wine Merchant

Henry do, 25, Italian Warehouseman

Louis do, 30, Portrait Painter

Edmund do, 20, Accountant

トーマスとヘンリーが商売をし、末弟のエドモンドが経理を担当していたことを示している。POLDとの矛盾はない。ところで他に、男性住込み使用者が1人、女性4人いた。また氏名の次は年齢欄であるが、ヘンリーやルイの分が間違っており、他の家族の分も各「証明書」や後年のCensusと矛盾しており、この年齢欄の信憑性は低い。

51年分では、210 & 211 Piccadilly の住所が明記され、次のようになっている。

Edmund do, 30, Clerk of Thomas & Henry Morel

Mary Anna do, 34, Wife

Henry Morel, 36, Wine Merchant & Italian Warehouseman

トーマス一家はノッティングヒルに住居を移したので、別に記載されている。さらに、男性住込み使用人が1人、女性4人いたが詳細は省いた。事務担当の末弟 Edmund Stephen が50年に Mary Ann Woolley と結婚し、世帯主扱いとなっている。なお、これ以降の年齢欄は、他の資料と照合して信憑性が高いといえる。

#### 4-2. 1860年以降

61年 Census では次のようになっている。

Edmund S. Morel, 40, Wine Merchant & Italian Warehouseman

Mary Ann ♪ , 43

Henry ♪ , 47, ♪

Ellen W ♪ , 8

Mary Ann ♪ , 6

52年に生まれた Ellen Woolley と54年生まれの Mary Ann は、エドモンドとメアリーの娘である。他に、男性住込み使用人が1人、女性使用人が3人いた。

ヘンリーは、トーマスが38年にエミリーと再婚したとき、50年にクリスティアーナと3回目の結婚をしたとき、およびモレルが62年にハリエットと結婚したとき、立会人として署名している。彼の「結婚証明書」もなく、Census でも妻に当る人を発見できないので、65年に亡くなるまで独身だったと考えられる。

71年 Census では、エドモンドとメアリー夫妻は、2人の女性住込み使用人と一緒に、ロンドンの南東部 Lee に住んでいる。他に中年の女性 Visitor が2人いる。

Edmund S. Morel, 50, Warehouseman

Mary A do, 55

64年から79年までの POLD では、次のように記されている。

Morel Brothers, wine merchants & italian warehousemen, 210 & 211 Piccadilly

この間他にスコットランドの Inverness に支店を有していたようだが、それは省いた。

71年の調査当時、エドモンドはピカデリーの店まで、通っていたものと思われる。そして、エドモンドは76年ロンドン北郊の Hampstead で亡くなった。55歳だった。

91年まで Morel Brothers の名称だが、92年から次のように変更された。

Morel Brothers, Cobbett & Son Limited, wine merchants, 210 & 211 Piccadilly; 1 & 2 Eagle Place; 18 & 19 Pall mall; 39 Whitcomb street; 143 Regent st & 19 swallow st. Regent st

76年エドモンドが亡くなった後、店の名称には「モレル」の名前が冠されているが、モレル家の人たちは誰もピカデリーの店に勤めていないと考えられる。

エドモンドの未亡人メアリーは、81年、91年、1901年は、英仏海峡に面するブライトンに隣接する Hove で、年金暮らしをしていた。そして1912年、97歳で亡くなった。

「モレル」の店は、1810年代にはブリューワー・ストリートにあったが、20年代に目抜き通りのピカデリーに移った。さらに各年の Census で、「モレル」には住込みの使用人が数人いた。したがって「モレル」の店は繁盛していたと考えられる。

51年 Census 時のトーマス一家、71年調査時のエドモンド一家ともに郊外に居を移し、住込みの使用人がいた。その意味で中流階級といっても差し支えなからう。

夫トーマスに先立たれたクリスティアーナ、寡婦となったエドモンドの妻メアリーは、ともに夫の死後、年金生活を送っている。さらに病弱で結婚しなかったモレルの妹アグネスも保有資産で暮らしを立てていた。したがって、モレル家の女性たちは、商売から離れても生活していくだけの資産を各自分与され保有していたと考えられる。

ところで、「モレル」の店は1910年まではピカデリーにもあったが、15年には少し南の Pall Mall へと完全に移り、ピカデリーとは縁がなくなった。そして2007年現在、初代技師長モレルの生地「ピカデリー210と211番地」は“Baron of Piccadilly”という洋服屋になっている。奇しくもその東隣はロンドン在住の日本人がよく利用する Japan Centre である。また「モレル」の店は、王室御用達の食料品店として続いている。

## 5. 母方祖父

母方祖父は William A'Beckett という事務弁護士である。本節では簡単に彼の経歴を探っていく。

### 5-1. 誕生～死亡

母方の祖父ウィリアム・エイベケットは、牧師の父 Thomas と母 Martha の間に、ウェールズに近い Doverdale, Worcester で1777年4月11日に生まれた。

ウィリアムは、1801年2月17日 Sarah Abbott と、ロンドン Hanover Square の St. George's Church で結婚した。なおハノーヴァー・スクエアは、彼が事務所を構えていたゴー

ルデン・スクエアから北西数百メートルのところにある<sup>8</sup>。

1855年5月に公表されたウィリアムの「遺言書」によれば<sup>9</sup>、次の6人の子供がいた。

(Sir) William  
 Thomas Turner  
 Gilbert Abbott  
 Arthur Martin  
 Emily Elizabeth (モレルの母)  
 Margaret Louise Jane

後述するように、彼らの母親名はすべてサラーとなっているが、「遺言書」では妻の名前は Jane となっている。したがって、末娘のマーガレットが生まれた後、彼らの実母サラーは1837年6月までに亡くなり、ウィリアムがジェインと再婚したと思われる。37年7月以降、サラー・エイベケットの「死亡証明書」、ウィリアムの「結婚証明書」を入手できれば確定できるが。

ウィリアムの「死亡証明書」によれば、Hampstead の自宅で、1855年2月23日77歳で亡くなった。後妻ジェインも1859年7～9月に Kensington で亡くなった。

表8 William A' Beckett の「死亡」1855年2月23日

Name	When died Age	Where died	Occupation	Cause of death
William a' Beckett	23-02-1855 77	The Grange, Heavenstock Hills, Hampstead	Gentleman	Decay of Nature

[出典]；FRC で入手した「死亡証明書」記載事項に基づき筆者が作成した。

## 5-2. 仕事と住所

*The Law List* (LL と略す)によれば、ウィリアムは1808年までには Solicitor(事務弁護士)として開業し、48年まで続けていた。NA の図書室には、1799年、1802年、08年、および11年以降、各年毎の LL があって、02年分と49年分にはウィリアムの記載がないので、そのように判断できる。

LL によれば、1808年から1822年までは、20, Broad Street, Golden Square で仕事をしていた。その間11年～15年には、George Daniel Weale と共同だった。以降は7, Golden Square を本拠地とした。それは公園を囲む東側の一角にある。「ゴールデン・スクエア」

8) 彼の長男の伝記である Benett, *Sir William A' Beckett*, の p.2, p.3 に拠る。

9) Catalogue Reference: Prob 11/2211. Image Reference: 208

の案内板によれば、19世紀中葉この界隈には下宿屋や、小さな宿屋があり、道具製作者、事務弁護士、建築家、技師、医者および議会代理人が居住していたという。

彼は、Walsham and Dilham Canal Company, Trustees for Paving Kensington, Neapolitan Embassy などの仕事を行っていた。38年版 LL には、次のような記述がある。

A' Beckett, Wm. Solicitor to the Neapolitan embassy, and principal clerk to North Walsham and Dilham canal company, 7, golden-square

彼は、Incorporated Law Society of the United Kingdom, by Charters of William IV and Victoria（「英国法律協会」）および Law Association for the Benefit of Widows and Families of Professional Men in the Metropolis and its Vicinity（「専門家の寡婦や家族への給付のための首都圏法律協会」）の会員であった。

LL では、39年から Joseph Dyer Sympson が共同弁護士となり、「ゴールデン・スクエア7番地」の事務所に併記された。48年には、ウィリアムの名前が消え、49年と50年には次男のトーマス・ターナーが共同弁護士として併記されている。51年からはエイベケットの名前がなくなる。50年にトーマス・ターナーがオーストラリアに移住したことで統合的である。

ところで、38年の Thomas Morel と Emily A' Beckett の「結婚証明書」では、彼女の住所がハムステッドになっている。

41年 Census によれば<sup>10</sup>、ハムステッドの The Grange, Hampstead に住んでいた。すなわちウィリアムは38年までには職住を分離し、事務所をゴールデン・スクエアに残したままハムステッドを住居としていたと考えられる。当時の地図によれば、拡張していくロンドンの北辺に位置している。

William Beckett, 60, Attorney

Jane do, 60

Margaret do, 20

他に住込みの女性使用人が2人いた。

51年 Census では、住所が40, Haverstock Hills, The Grange, St. John, Hampstead となっている。48年頃引退したこととも統合的である。

William aBeckett, 73, Retired Solicitor

Jane do, 73

---

10) Census の個票では A' Beckett の “A'” が欠落しているが、転記時に脱落したものと考えられる。またモレル一家の場合と同じく、このときの年齢は大雑把であり若干注意を要する。

他に同居の姪とその子供、および女性使用人が2人いた。

POLDのStreet Directoryによってヘイヴァーストック・ヒルズで、ウィリアム・エイベケットを探すと次のことが判明する。48年版にはなく、51年版から彼の名前が記載されている。残念ながら49～50年版がNAの図書室にはない。55年版ではウィリアム名だが、56年版ではMrs. A' Beckettとなっており、彼が55年2月23日77歳で亡くなったことと矛盾がない。

### 5-3. ラルフ・ニクルビーのモデル；補論

ところで、ウィリアムはCharles Dickensの小説*Nicholas Nickleby*に登場するRalph Nicklebyのモデルと言われている。ディケンズ研究家の原英一氏の紹介によれば、ラルフは「守銭奴の高利貸し。甥のニコラスには嫌悪を抱き、姪のケイトは金儲けのために利用しようとする。目的のためには手段を選ばない冷酷で強欲な男。最後にすべての悪事がばれて自殺する。」<sup>11</sup>

ディケンズがラルフに託して意趣返しした小説の人物像を、モデルとされるウィリアムの性格であるとして全面的に無批判に受入れることに、筆者は躊躇する。確かに「ウィリアムをラルフのモデル」とする説に、彼の息子達も賛同している<sup>12</sup>。しかし単なるモデルにすぎず、ラルフとウィリアムの性格が合致あるいは類似しているという確定的証拠が提示されているわけではない。

このような片方みの主張を、にわかには採用しがたい。父親が保守的だったとしたら、「軽薄なゴシップ雑誌にうつつをぬかしている不屈きな息子達」と映ったのかもしれない。息子たちにとっては、生母サラの死と義母ジェインも微妙な影を落とし、父親との確執があったのかもしれない。また家庭内のことなので外部の人間、ましてや後世の我々には臆しがたい面があろう。しかし少なくともウィリアムは息子たちを学校に行かせ、社会人として育て上げ世に送り出している。いずれにせよ、一方的非難は慎むべきである。

他方「遺言書」で、娘婿トーマス・モレルの名前を取上げ、500ポンドを遺贈した上で、残余があれば末娘のマーガレットと分けるように、ウィリアムは述べている。1822年Edwards Square, Kensingtonの評議員から贈られた銀杯や食器、および彼らの母親サラの肖像画を与えるとも記している。後顧の憂いがなかったのか、社会的に成功した息子達への言及は少ないが、ピカデリーのワイン商トーマス・モレルの再婚相手となり、幼い子

11) ディケンズ・フェロウシップ日本支部ホームページ, Nicholas Nickleby 『ニコラス・ニクルビー』, 「主な登場人物」

12) たとえばBennett, *Sir William A' Beckett.*, pp. 4～5 参照。



ども3人（長女エミリー、長男エドモンド、次女アグネス）を残して46年に31歳で事故死したエミリーへの配慮が縷々述べてある。そこには優しい父親の心情が感じられる。

これらのことから少なくとも筆者は、ウィリアムは子ども達を立派に育て上げ、その中で夭折した娘の遺族へ心配りを怠りない人物であるという側面も、考慮すべきではないかと考えている。

つまり「ラルフのごとし」という説に、筆者は軽々には与することができない。

## 6. 伯父や叔母

モレルの経歴を語る上で、オーストラリアとの関係を中心に母方の伯父の存在は重要な意味合いを持っていると考えられる。そこで、本節では *Oxford Dictionary of National Biography*), *Australian Dictionary of Biography*, および *Benett, Sir William A'Beckett* を中心に、伯父や叔母および従兄弟達について述べていこう。また LL で補充した。ところで下記で取り上げた以外に、ウィリアム卿の3男 Edward Fitzhayley A' Beckett も、LL に拠れば法律家となっている。

### 6-1. ウィリアム卿

William A' Beckett（父親と同名）は、父ウィリアムと母サラーの長男として、Broad Street で1806年7月28日に生まれた。16年から Westminster School で学んだ後、22年11月15日に高等法院の一つ Lincoln's Inn に入り、29年6月30日法律家となった。文筆の才能にも恵まれいくつか執筆したが、それだけで生計を立てることは困難と判断し、法曹界に専念することにした。

32年10月1日、Edward Hayley の娘；従姉の Emily と St. Pancras Church で結婚した。

36年末に妻、3人の息子、義父母や義妹たちと一緒に英国をたって、37年5月 Sydney に到着した。J.H. Plunkett の提案で6月1日オーストラリア植民地の裁判所に勤務することとなった。41年3月には Acting Solicitor-General（給料は年800ポンド）、New South Wales 州の最高裁判所では次席であったが、43年3月までは植民地省に承認されてはなかった。44年7月 Acting Judge になった。45年植民地省は、Melbourne の Resident Judge に転勤を命ぜられ、46年2月彼はそれを受入れた。ヴィクトリア女王の命で、9月彼の地位は恒久的になった<sup>13</sup>。

---

13) LL では、30年以降シドニーと記載されている。筆者の転記ミスであろうか。

52年 Victoria 州の最高裁判所が創設され、1月24日にウィリアムは初代の最高裁判所 Chief Justice となった。11月24日に爵位を受け Sir William となった<sup>14</sup>。

法廷での仕事ぶりは賞賛され、判決文も明晰で、法の支配を定着拡充させていった。

46年6月1日妻エミリーが、シドニーで4人の息子を残して亡くなり、息子達、義父母、義妹たちがメルボルンへ引っ越してきた。49年10月30日、ウィリアムはエミリーの末妹の Matilda と再婚した。

クリケット試合中の怪我がもとで、43年から両足の中風を患い、それが年々悪化していった。53年休暇を取って英国に帰り、医者に診てもらったが回復しなかった。57年2月、ついに退職を決意し、惜しまれつつ最高裁判所長官を辞した。年金は引退時の給料の半分1500ポンドであった。

ところで、61年英国の Census によれば、ウィリアム卿は Surbiton, Surrey に、妻マティルダ、息子 Reginald Broadhurst A' Beckett, 姪 Emily Morel(モレルの姉)と同居している。エミリーは60年11月24日に父トーマスを亡くしていた。他に住込みの召使いとして、61歳の女性 cook 1人、双方とも27才の女性 house maid 2人、22歳の lady's maid 1人、62歳の coach man 1人の5人が同居していた。家族を連れて英国に戻っていること、5人の召使を雇っていることから、この調査が行われた4月7日時点で既に英国に帰国定住していたと考えられる<sup>15</sup>。

その後、同じサリー州の Upper Norwood, Surrey に移り、当地で69年6月27日亡くなった。62歳だった。

Sir William と Emily の間には4人の子どもがあった。

William Arthur Callender

Malwyn (1834年9月26日生まれ)

Edward Fitzhayley (1837年4月16日生まれ)

Reginald Broadhurst (1840年生まれ)

その息子の William Arthur Callender A' Beckett (通称 WAC) は、33年7月7日ロンドンで生まれた。52年1月から父ウィリアム卿の仕事を手伝った。53年家族と離れて英国

---

14) Dawning Street (首相府) よりの叙勲通知書1852年11月13日付;NA 請求番号【HO45/8660】参照。

なお本稿では“Chief Justice of the Supreme Court”を「最高裁長官」と訳しておく。

15) 調査日については、Bevan, *Tracing Your Ancestors*, p.34参照。

ベネットは、63年までに定住したとしているが(同書, p.103), 以上から61年には既に英国に住み始めていたと思われる。

に行き、KCLで学んだ。54年12月メルボルンに帰り、また父の仕事を手伝った。

WACは55年9月17日、John Millsの一人っ子Emma（1838-1906）と結婚した<sup>16</sup>。2男4女の子どもができた。WACの次女Emma Minnie（1858-1936）は絵描きであった。86年同じ絵描きのArthur Merric Boyd（1862-1940）と結婚し、著名な芸術家一家を輩出した<sup>17</sup>。

絵描きでもあった3女Constance Matildaは、88年弁護士のFrank Pilkington Brettと結婚した。長男William Gilbertはケムブリッジ大学で学び、インナー・テンプルで弁護士となった。

WACは68年1月から豪州の政界に入り、70年代前半に2回大臣も経験した。議会人としては勤勉で、あらゆる問題を議論した。60年代には、他方magistrateも務めた。86年ロンドンに赴き、87年には高等法院のInner Templeに入った。92年メルボルンに帰り、1901年12月1日、St. Kildaの病院で亡くなった。

## 6-2. トーマス・ターナー

Thomas Turner A' Beckettは、父ウィリアムと母サラーの次男として、1808年9月13日ロンドンで生まれた。兄ウィリアムと同じくウェストミンスター学校で学んだ後、リンカーンズ・インに入った。LLによれば、29年弁護士となり、30年には父と一緒に実務に着いた。32年～37年には、Edward-square, Kensingtonにある舗装信託会社で書記をしていた。リンカーンズ・インにいた37年～39年から、40年から48年まではゴールデン・スクエアの事務所で、父と協力した。49年～50年には、シンプソンと共同していた。

彼はMetropolitan and Provincial Law Association（「首都圏および地方法律協会」）の会員であった。法改革に関心を寄せ、Law Amendment Society（「法改正協会」）の会員となった。いくつかパンフレットも書いた。

50年にシドニーに移住していた法律家の兄ウィリアムおよび外科医の弟Arthur Martinを訪問した。56～60年にはニュー・サウス・ウェールズ州の立法評議会で働き、その後ヴィクトリア州に定住することを決心した。51年版LL以降、彼の名前が記載されなくなったのと整合的である。

事務弁護士・公証人として前途洋々たる実績をつくっていった。彼の経験は植民地社会

---

16) 57～82年のWACの日記、1857～1905年の妻エマの日記がNational Library of Australiaで公開されているという。

17) Niall, *The Boyds* 参照。

にとって価値があり、20年以上その職務にあった貯蓄銀行や保険会社、および鉄道会社の議長として高く評価された。

52年から立法評議会非公式委員として政治活動を始めた。58年から20年間 Central Province の評議員代表を務め、法改革に熱心に取り組んだ。60年11月から1年間無任所大臣も経験したが、表舞台からは78年引退した。

彼は Eliza Stuckey と結婚し、3男4女の子どもがあった。エリザが亡くなった後、その妹の Laura Jane と再婚した。

92年7月1日、ビクトリア州の Brighton で亡くなった。82歳だった。

1836年8月31日に生まれた彼の息子 Thomas A' Beckett は、英国に帰って法律を勉強することにし、57年5月から59年11月まで父と同じくリンカーズ・インで学んだ。成績優秀により奨学金をもらい、法廷弁護士となったが、60年6月にメルボルンに帰った。64~72年書記官 (law reporter), 72~79年『タイムス』のメルボルン特派員, 74~81年メルボルン大学で司法手続きの講師をつとめた。1909年上級次席判事となり、爵位を受けた。1917年7月31日引退するまでその地位にあった。Sir Thomas は、19年6月21日 Armadale の自宅で亡くなった。

トーマス卿の長男 Thomas Archibald A' Beckett は、有名な女性教育者 Ada Mary Lambert と1903年に結婚した。

### 6-3. ギルバート・アボット

Gilbert Abbott A' Beckett は、父ウィリアムと母サラーの3男として、1811年2月17日に生まれた。20年1月から28年8月まで兄たちと同様ウェストミンスター学校で学んだ。このときから父ウィリアムと仲違いして20年以上会わなかったという。

卒業後、兄2人と *The Censor* (観閲という意味) という雑誌を創刊した。彼は31年に *Literary Beacon* (文芸指標という意味)、32年に *Evangelical Penny Magazine* (福音書の廉価誌という意味)、33年に *The Thief* (盗人という意味)、そして37年には *The Wag* (剽軽者という意味) ように13もの雑誌を創刊したが、全て失敗したという。他方31年12月に、*Figaro in London* (風刺的な戯曲に因む名前) をパリの『フィガロ』を手本に漫画で表紙を飾り、ゴシップ、風刺、および劇場評論などを掲載し、これには成功した。一時発行部数が70,000部にもなり、1年に1,000ポンドの所得をもたらした。この方はより大規模で長命の41年に発刊された *Punch* (漫画・諷刺画誌) に、引継がれることとなった。彼は創刊時から最も頻繁に寄稿した。他にも *The Times*, *Morning Herald*, それに *Illustrated London News* などの諸新聞にも盛んに寄稿した。

演劇にも関心を寄せ、評論するだけでなく台本も書いたりした。40にもものぼる台本を出版しただけでなく、他にも20の芝居が彼の手によるとされている。34年に Fitzroy 劇場で公演された *The King Incog*, 53年 Adelphi 劇場公演の *Sardanapalus, or, the 'Fast' King of Assyria* など。他にもディケンズのクリスマスものの脚色を手がけ、彼とも親しかった。

仲間達と共同してパロディーものも書いた。その中に44年の *The Comic Blackstone*, 47年の *The Comic History of England*, 51年の *The Comic History of Rome* などが挙げられる。

ギルバート・アボットは、同時に法律の分野でも活躍した。28年4月25日に高等法院の一つ Gray's Inn に入った。41年1月27日に法廷弁護士に任じられ、優秀で高潔な人という評判を得た。Poor Law Commission（「救貧法委員会」）にも加わり、Andover 作業所問題の報告書も執筆した。49年には Metropolitan Police Magistrate（首都圏警察行政長官）に就任し、初は Greenwich その後 Southwark が任地であった。41年以来 Reform Club の会員であり、42年には Garrick Club にも入った。

35年1月21日、Joseph Glossop の娘 Mary Ann（1817-63）と結婚した。脚本家で風刺作家の長男 Gilbert Arthur A' Beckett（1837-1891）、ユーモア作家でジャーナリストの3男 Arthur William（1844-1909）を含む4人の息子と2人の娘があった。

ところで、ギルバート・アーサーは Bath の治安判事 William Hunt の長女 Emily と63年結婚し、1男1女があった。その娘 Minna は96年に Sir Hugh Charles Clifford と結婚した。ヒュー卿は1900～01年 Labuan and North Borneo の提督となった。時代的ズレはあるが、モレルとの微かな接点といえよう。

ギルバート・アボットは家族で休暇旅行中の56年8月30日、フランスの Boulogne でチフスに罹り死亡した。45歳だった。友人であったディケンズらの手紙や追悼文で、彼の才能や貢献を知ることができる。

#### 6-4. アーサー・マーティン<sup>18</sup>

Arthur Martin A' Beckett は、父ウィリアムと母サラの4男として1812年ロンドンで生まれた。34年 London University の医学生となり、いくつか賞も獲得した。35年に Apothecaries' Company（「薬剤師組合」）の資格を取得し、38年3月に Royal College of Surgeons の会員試験に合格し、55年12月には同大の Fellow となった。

---

18) アーサー・マーティンの経歴は、主として *The Medical Journal*（『医学誌』）1871年9月2日号の「追悼記事」による。

35年から37年までスペインの英軍で軍医として働き、叙勲された。上官であった Sir Rutherford Alcock (のち1859-64年初代駐日英国公使) からも彼の人格や行動を賞賛した。

38年春に兄ウィリアムのいるシドニーに行った。当地で着実かつ急速に認められ、高い地位を得、活動範囲も広がった。ニュー・サウス・ウェールズ州の Legislative Council (立法諮問会議) の第1期の委員となり、数年間 Benevolent Asylum (博愛施設) で外科医を務めた。シドニー大学医学部の試験官、オーストラリア博物館理事、王立地理学会会員でもあった。

43年 Emma Louise Elwin を娶った<sup>19</sup>。息子に議会派の William Channing A' Beckett (1846年1月1日～1929年6月16日) がいる。

71年8月に亡くなった。

#### 6-5. マーガレット・ルイズ・ジェイン

Margaret Louise Jane A' Beckett は21年頃生まれた。ヴィクトリア女王に仕え、女王の子ども達の小さな肖像画も描いた。これは Wight 島の Osborne House の廊下に飾られているという。

43年4～7月に法律家の Thomas Hull Terrell と、St. James, Westminster で結婚した。4人の子どもがあった。

テレルは、John Terrell と Elizabeth の子どもで、1809年1月23日に生まれ、95年フランスで亡くなった。前述のトーマス卿は、英国遊学中テレルから法律を学んだという。なお彼は、妻マーガレットの死後 Isabella Mary F. Sprye と73年に結婚した。

ところで、マーガレットは義兄トーマス・モレル (モレルの父親) がクリスティアーナと1850年に再婚したとき、弟のヘンリー・モレルとともに立会人として同席署名している。亡き姉 (エミリー・モレル) の夫との良好な関係が継続していたことを窺わせる。

マーガレットは、姉のエミリーと約6歳離れていること、ウィリアムの後妻ジェインの名前を冠されていることから、ウィリアムとジェインの子供かもしれない。他方ウィリアムが遺言に記したように、サラーの肖像画はエミリー (46年に亡くなっている) の夫トーマス・モレル) がもらうことになっている。

マーガレットは、71年10～12月にケンジントンで亡くなった。54歳だった。

---

19) その前に38年、Marylebone で結婚していたようである。この間にその妻とは死別したと思われる。

## 7. 本稿で明らかになったこと

以上本稿で明らかになったモレルの家系をまとめておこう。

### A. トーマス一家

- ① Thomas Annet Lewis Morel は、Louis と Mary の子供として08年頃 Westminster で生まれた。
- ② トーマスは父の仕事を継ぎ、弟の Henry や Edmund Stephen と Piccadilly でワイン商などを営んでいた。
- ③ 33年9月28日に Ann Martin Lopes と結婚した。子供はなく、アンは37年6月までに死亡したと思われる。
- ④ トーマスは38年9月22日に Emily Elizabeth A' Beckett と再婚した。Emily (39年生まれ、母親と同名)、Edmund、Agnes (42年生まれ) の3人の子供ができた。
- ⑤ 妻エミリーは46年8月1日31歳のとき、ピカデリーの自宅で事故死した。
- ⑥ トーマスは50年5月16日、Christiana Lodder Budd と再婚し、直後に Notting Hill に転居した。
- ⑦ トーマスは60年11月24日、長患いの後肝臓病のため52歳で死亡した。
- ⑧ クリスティアーナは、トーマスの死後 Eastbourne で寡婦暮らしをし、77年6月6日69歳で没した。彼女に子供はできなかったと思われる。

### B. 姉妹

- ① 姉 Emily が、39年10月5日 Piccadilly で生まれた。
- ② エミリーは父の死後、母方の伯父 Sir William A' Beckett と同居していた。
- ③ 66年10月18日に、医学博士の George James Stilwell と結婚したが、翌年夫が死亡し寡婦となった。  
エミリーに子供はいなかったと思われる。
- ④ 1929年6月12日89歳で、ロンドン郊外の Bromley で亡くなった。  
それまで財産収入で生活していた。
- ⑤ 妹 Agnes が、42年9月11日に Piccadilly で生まれた。
- ⑥ アグネスは病弱だったこともあり、結婚しなかった。
- ⑦ 1898年7月17日55歳で乳癌のため、ロンドン郊外の Wandsworth で亡くなった。  
その間、財産収入で生活していた。  
したがって、モレルの姉妹には子どもがいなかった。

### C. 父方祖父

- ① Louis は Mary (旧姓: Boden) と1804年11月25日に結婚した。
- ② Mary とは14年以降に死別し (Henry は Mary の子供), その後 Jane と再婚した。  
(Charles と Edmund の「出生証明書」が手元になく, 現段階では彼らの母親を特定できない。)
- ③ Louis は, 37年初め頃死亡したと考えられる。  
彼の「遺言書」, POLD, および Thomas と Emily の「結婚証明書」欄から。
- ④ 年齢順に Thomas, Louis (同名), Henry, Charles, Edmund と5人の息子がいた。  
Louis は12年頃, Henry は14年10月30日, Edmund は21年頃の生まれである。  
Henry までは少なくとも Louis と Mary の間の子供である。
- ⑤ Louis は肖像画の絵描きになり, 42年5月13日29歳の若さで亡くなった。  
Henry は, 結婚せず65年に死亡した。  
Charles Baptiste は, 41年 Census でモレル家の項に登場せず, 詳細は不明である。  
Edmund Stephen は, 50年に Mary Ann Woolley と結婚し, 76年に死亡した。
- ⑥ Louis の後妻 Jane は, 39年に亡くなった。
- ⑦ 名前から Louis はフランス系と考えられる。

### D. モレル家の商売

- ① Louis は11年以降14年までに, 34 Brewer Street, Golden-Square で油商を始めた。
- ② その後19~22年に, 目抜き通りの210 Piccadilly に移転した。
- ③ 30年頃, 210 & 211, Piccadilly に拡張し, ワインも扱い始めた。
- ④ Louis の息子 Thomas, Henry, Edmund が父の仕事を助けていた。
- ⑤ 37年頃 Louis がなくなり, 3人が商売を継いだ。Edmund は経理事務を担当していた。  
イタリア製品の卸とワイン商。
- ⑥ Thomas が60年に死亡したが, Henry と Edmund の兄弟で商売を続けた。
- ⑦ 彼らは住み込み使用人を雇っていた。商売が繁盛していたと考えられる。
- ⑧ 郊外に移転した時, 住込み使用人がいたという意味で, 中流階級であったと言えよう。
- ⑨ 死亡後, 妻や子供たちに資産を残すことができた。裕福であったと言えよう。
- ⑩ Louis の孫は, 商売を継がなかったと考えられる。
- ⑪ 「モレル」の店はその後も存続し, 1910年までは Piccadilly にもあったが, 15年には  
Pall Mall へと完全に移った。
- ⑫ モレルの生地は現在, Baron of Piccadilly という洋服屋になっている。



### E. 母方祖父

- ① William は、父 Thomas 母 Martha の間に、1777年 Worcester 州で生まれた。
- ② 彼は Sarah Abbott と1801年にロンドンで結婚し、4男2女の子供がいた。  
Sarah は末娘の Margaret が生まれた後、亡くなった。
- ③ その後、37年6月までに Jane と再婚した。
- ④ 彼は事務弁護士で、08年までに Golden-Square で開業し48年まで仕事をしていた。
- ⑤ ゴールデン・スクエアの事務所は、39年から J.D.Sympson が共同弁護士となった。  
48年には William の名前が消え、49年と50年には次男の Thomas Turner が共同弁護士として併記されている。51年からは A' Beckett の名前がなくなる。
- ⑥ 遅くとも38年までに Hampstead に居を構え、以降亡くなるまで住んでいた。
- ⑦ William は55年77歳で、後妻の Jane も59年に（81歳位で）亡くなった。
- ⑧ William は Dickens の小説に登場する守銭奴のモデルと言われている。しかし小説は元来フィクションであり、両者が仲違いしたこと、および「遺言書」で不遇だった娘に配慮していることを勘案すると、この説を鵜呑みにできにくい。

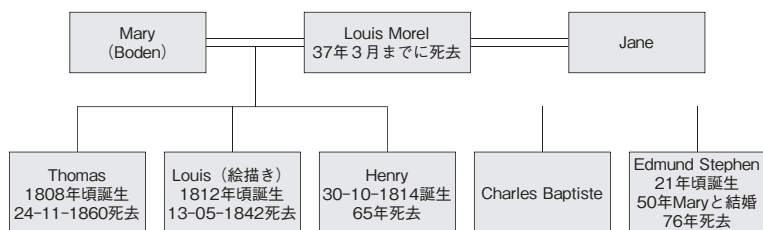
### F. 母方伯父叔母（モレルとの関連で60年前後を中心に）

- ① 伯父 Sir William は、57年に Victoria 州最高裁長官を辞し、61年には帰英して Surrey 州に住んでいた。その頃、父 Thomas を亡くした姉 Emily Morel と同居していた。  
従兄 William Arthur Callender（Sir William の長男）は、53～54年 King's College, London で学んだ後、オーストラリアに帰った。
- ② 伯父 Thomas Turner は、50年にオーストラリアに移住し、60年頃は法改革に取り組んでいた。  
従兄 Sir Thomas は、57～59年 Lincoln's Inn で学び、法廷弁護士となったが、60年6月にメルボルンに帰った。
- ③ 伯父 Gilbert Abbott は、*Punch* などの雑誌の創刊者・編集者として活躍していたが、56年フランスで客死した。
- ④ 伯父 Arthur Martin は、38年に渡豪し、外科医や政治家として活躍していた。

【付属資料】 A. Morelの家系

1. 父方祖父母

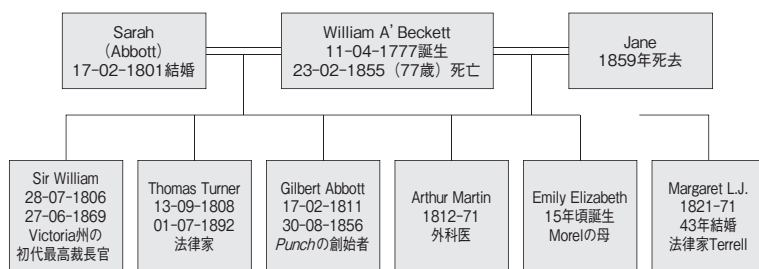
- ・1804年11月25日, Maryと結婚。Janeと再婚。〔遺言書〕
- ・少なくとも, HenryまではMaryとの間の子。〔出生証明書〕
- ・少なくとも5人の子供がいた。〔遺言書〕



① 系図；父方祖父母 Louis Morel 一家

2. 母方祖父母

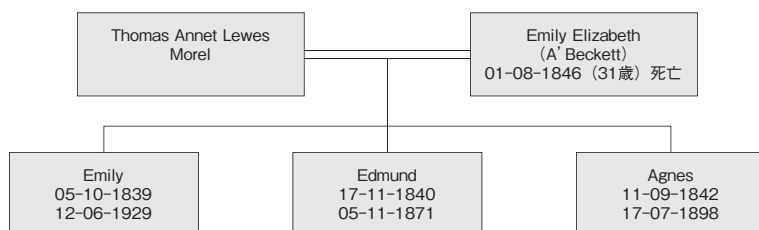
- ・Benett, *Sir William A'Beckett, Australian Dictionary of Biography* を加味。
- ・祖父はSolicitor (事務弁護士) だった。
- ・少なくとも6人の子供がいた。〔遺言書〕



② 母方祖父母 William A' Beckett 一家

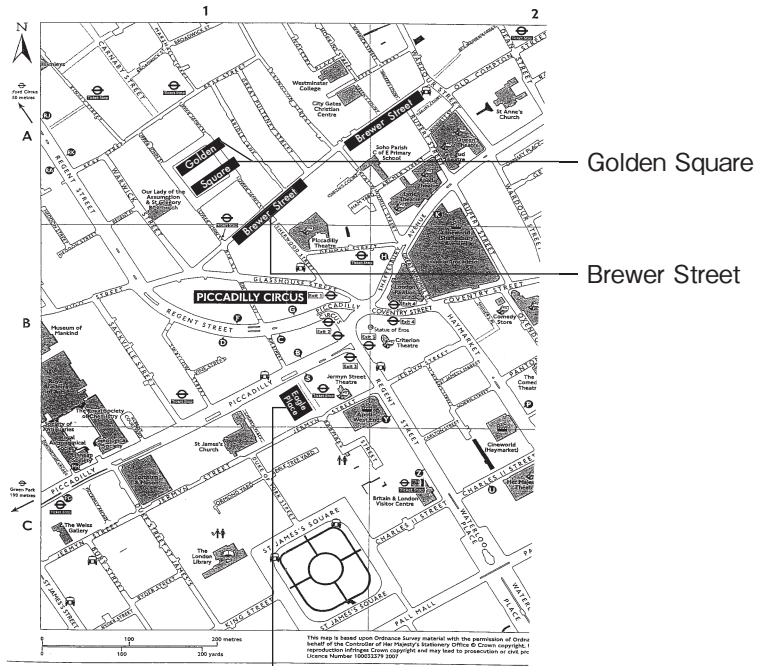
3. 父の再婚

- ・1838年9月22日再婚②〔結婚証明書〕
- ・3人の子供が生まれた。〔出生証明書〕
- ・母Emilyは46年に事故で死亡〔死亡証明書〕
- ・妹Agnesは, 病弱結婚せず, 55歳で死亡〔Censusなど〕

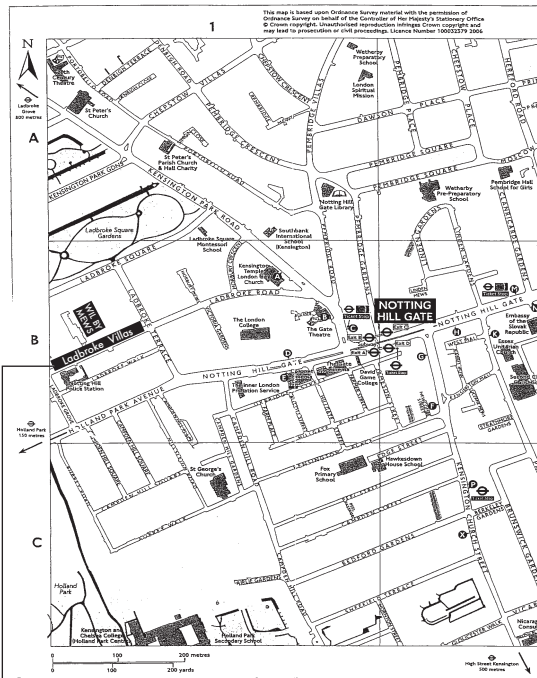


③ Thomas Morel 一家

モレルの家系（林田治男）



④ モレルの「生地 Eagle Place」の現在の地図



⑤ 「50年代の住居 Ladbrooke Villas」の現在の地図

大阪産業大学経済論集 第10巻 第2号

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF MARRIAGE  
GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: G218219

1822 Marriage solemnized at St. Paul's Church, in the Parish of St. Andrew, in the County of Middlesex

No.	Name	Rank or Name	Sex	Age	Profession	Religion	Place of Birth	Signature of Minister
1	Thomas Morel	Esq.	M	28	Merchant	Anglican	St. Paul's Church, Middlesex	[Signature]
2	Emily A. Beckett	Miss	F	22	At Home	Anglican	St. Paul's Church, Middlesex	[Signature]

MARRIED to the said Emily A. Beckett by the said Thomas Morel in the presence of the said Thomas Morel and Emily A. Beckett as witnesses.

Witnessed by the said Thomas Morel and Emily A. Beckett as witnesses.

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a register of Marriages in the Registration District of Edmonton Given at the General Register Office, under the Seal of the said Office, the 25th day of July 2007

MXD 322590

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE (PUNISHABLE OFFENCE)  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF DEATH  
GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: G219337

REGISTRATION DISTRICT: St. James Westminster  
1848 DEATH in the Sub-district of St. James Square in the County of Middlesex

No.	When and where died	Name and surname	Sex	Age	Occupation	Cause of death	Signature, description and residence of informant	When registered	Signature of register
1	1848	Emily Beckett	F	22	At Home	Consumption	[Signature]	1848	[Signature]

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a Register of Deaths in the District above mentioned.  
Given at the GENERAL REGISTER OFFICE, under the Seal of the said Office, the 15th day of August 2007

DVB 610099

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE (PUNISHABLE OFFENCE)  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.

⑥ Thomas Morel と Emily A' Beckett の「結婚証明書」

⑦ Emily の「死亡証明書」

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF MARRIAGE  
GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: B309335

1822 Marriage solemnized at St. Paul's Church, in the Parish of St. Andrew, in the County of Middlesex

No.	Name	Rank or Name	Sex	Age	Profession	Religion	Place of Birth	Signature of Minister
1	Thomas Morel	Esq.	M	28	Merchant	Anglican	St. Paul's Church, Middlesex	[Signature]
2	Christiana	Miss	F	22	At Home	Anglican	St. Paul's Church, Middlesex	[Signature]

MARRIED to the said Christiana by the said Thomas Morel in the presence of the said Thomas Morel and Christiana as witnesses.

Witnessed by the said Thomas Morel and Christiana as witnesses.

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a register of Marriages in the Registration District of St. James Westminster Given at the General Register Office, under the Seal of the said Office, the 17th day of August 2007

MXD 361090

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE (PUNISHABLE OFFENCE)  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.

⑧ Thomas と Christiana の「結婚証明書」

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF DEATH  
GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: G218019

REGISTRATION DISTRICT: Kennington  
1860 DEATH in the Sub-district of Kennington Town in the County of Surrey

No.	When and where died	Name and surname	Sex	Age	Occupation	Cause of death	Signature, description and residence of informant	When registered	Signature of register
1	1860	Thomas Morel	M	30	Merchant	Consumption	[Signature]	1860	[Signature]

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a Register of Deaths in the District above mentioned.  
Given at the GENERAL REGISTER OFFICE, under the Seal of the said Office, the 29th day of July 2007

DVB 589092

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE (PUNISHABLE OFFENCE)  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF DEATH  
GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: W157061

REGISTRATION DISTRICT: Eastbourne  
1877 DEATH in the Sub-district of Eastbourne in the County of Sussex

No.	When and where died	Name and surname	Sex	Age	Occupation	Cause of death	Signature, description and residence of informant	When registered	Signature of register
1	1877	Emily Beckett	F	22	At Home	Consumption	[Signature]	1877	[Signature]

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a Register of Deaths in the District above mentioned.  
Given at the GENERAL REGISTER OFFICE, under the Seal of the said Office, the 30th day of August 2007

DVB 626437

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE (PUNISHABLE OFFENCE)  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.

⑨ Thomas と Christiana の「死亡証明書」

# モレルの家系 (林田治男)

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF BIRTH GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: B310044

REGISTRATION DISTRICT: **SAINT JAMES WESTMINSTER**  
1829 BIRTH in the Sub-district of **St James's Square** in the County of **Middlesex**

Class-	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
No.	When and where born	Name, if any	Sex	Name and surname of father	Name, surname and maiden surname of mother	Occupation of father	Signature, description and residence of informant	When registered	Signature of register	Place where registered
1	1829	Emily	F	James	Agnes		James Agnes	1829		

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF BIRTH GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: B09447-1

REGISTRATION DISTRICT: **SAINT JAMES WESTMINSTER**  
1842 BIRTH in the Sub-district of **St James's Square** in the County of **Middlesex**

Class-	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
No.	When and where born	Name, if any	Sex	Name and surname of father	Name, surname and maiden surname of mother	Occupation of father	Signature, description and residence of informant	When registered	Signature of register	Place where registered
1	1842	Agnes	F	James	Agnes		James Agnes	1842		

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a Register of Births in the District above mentioned.  
Given at the GENERAL REGISTER OFFICE, under the Seal of the said Office, the 17th day of September 2007

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a Register of Births in the District above mentioned.  
Given at the GENERAL REGISTER OFFICE, under the Seal of the said Office, the 2nd day of January 2009

BXCC 706214

BXCD 603304

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE KNOWN OR SUSPECTED TO BE SUCH.  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.



## ⑩姉 Emily, 妹 Agnes の「出生証明書」

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF MARRIAGE GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: B310044

1846 Marriage solemnized at **St. James's Square** in the Parish of **St. James's** in the County of **Middlesex**

No.	Date	Name of bride	Age	Name of groom	Age	Signature of bride	Signature of groom	Signature of officiating minister	Signature of witnesses
1	1846	Emily	27	James	27			James Agnes	James Agnes

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a register of Marriages in the Registration District of **Kingston**.  
Given at the General Register Office, under the Seal of the said Office, the 17th day of September 2007

MXD 400839

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE KNOWN OR SUSPECTED TO BE SUCH.  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.



## ⑪姉 Emily の「結婚証明書」

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF DEATH GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: B09441-1

REGISTRATION DISTRICT: **BROMLEY**  
1929 DEATH in the Sub-district of **Beckenham** in the County of **Kent**

Class-	1	2	3	4	5	6	7	8	9
No.	When and where died	Name and surname	Sex	Age	Occupation	Cause of death	Signature, description and residence of informant	When registered	Signature of register
1	1929	Emily	F	27			James Agnes	1929	

CERTIFIED COPY OF AN ENTRY OF DEATH GIVEN AT THE GENERAL REGISTER OFFICE  
Application Number: B09452-1

REGISTRATION DISTRICT: **WANDSWORTH**  
1898 DEATH in the Sub-district of **Putney** in the County of **London**

Class-	1	2	3	4	5	6	7	8	9
No.	When and where died	Name and surname	Sex	Age	Occupation	Cause of death	Signature, description and residence of informant	When registered	Signature of register
1	1898	Agnes	F	27			James Agnes	1898	

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a Register of Deaths in the District above mentioned.  
Given at the GENERAL REGISTER OFFICE, under the Seal of the said Office, the 5th day of January 2009

CERTIFIED to be a true copy of an entry in the certified copy of a Register of Deaths in the District above mentioned.  
Given at the GENERAL REGISTER OFFICE, under the Seal of the said Office, the 2nd day of January 2009

DVC 167516

DVC 167017

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE KNOWN OR SUSPECTED TO BE SUCH.  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.

CAUTION: THESE ARE OFFICES RELATING TO FALSIFYING OR ALTERING A CERTIFICATE AND USING OR POSSESSING A FALSE CERTIFICATE KNOWN OR SUSPECTED TO BE SUCH.  
WARNING: A CERTIFICATE IS NOT EVIDENCE OF IDENTITY.



## ⑫姉 Emily, 妹 Agnes の「死亡証明書」

【写真】



①父達がワイン商などをしていた210&211 Piccadilly にある洋服屋 Baron of Piccadilly

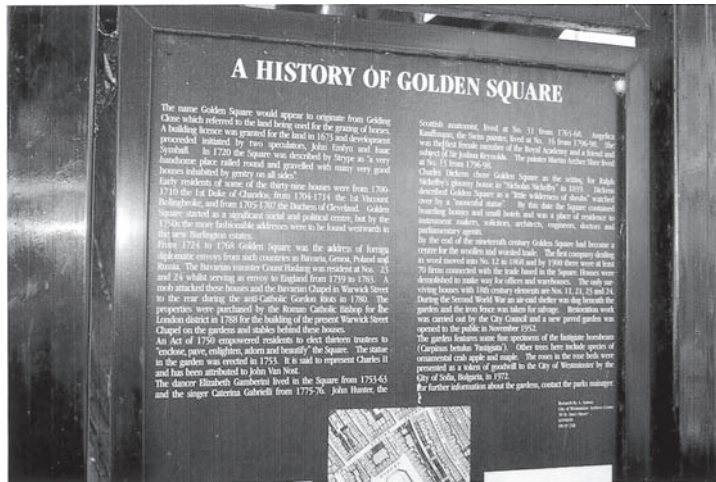


②生地；Eagle Place の Piccadilly 側角地，その路地



③50年代に一家が住んでいた20 Ladbroke Villas, Notting Hill

モデルの家系（林田治男）



④ Golden Square の案内板



⑤ William A' Beckett の事務所があった場所を望む

**【参考資料】**

- Bevan, Amanda, *Tracing Your Ancestors in the National Archives*, 7<sup>th</sup> revised edition, the National Archives, 2006.
- The A to Z of Victorian London*, introductory notes by Ralph Hyde, London Topographical Society, 1987.
- Australian Dictionary of Biography*, Melbourne University Press, 1979.
- The British Medical Journal*,
- Ferguson, John Alexander, *Bibliography of Australia*, Angus and Robertson, 1963, Facsimile reprint, National Library of Australia, 1977.
- General Index to the Old Ordnance Survey Maps of London (Godfrey Edition) North- West London*, compiled by George C. Dickinson.
- The Law List*.
- Old Ordnance Survey Maps, the Godfrey Editionのうち the West End 1870, Notting Hill 1871, Holland Park & Shepherds Bush 1871.

**【参考文献】**

- Bennett, John Michael, *Sir William A'Beckett; First Chief Justice of Victoria, 1852 - 1857*, The Federation Press, 2001.
- Dickens, Charles, *Nicholas Nickleby*,
- Niall, Brenda, *The Boyds; a Family Biography*, The Miegunyah Press, 2002.